

## パズル課題における韓国の3歳児と4歳児の行動の比較

傅佳慧 (東邦大学 理学部, scarlettfu229@gmail.com)

菊地 賢一 (東邦大学 理学部, kikuchi@is.sci.toho-u.ac.jp)

3-year-old and 4-year-old Korean children's behavioral responses to puzzle tasks

Jiahui Fu (Faculty of Sciences, Toho University, Japan)

Kenichi Kikuchi (Faculty of Sciences, Toho University, Japan)

### Abstract

When we think of Eastern Cultures, Japan, China and Korea immediately comes to mind. When we compare Eastern to Western Cultures, the popular believe is that Japan, for example, is a collective culture and The United States is an individualistic culture. I call that the one size fits all comparison as there's so much more to meet the eye. Takano & Osaka (1999) and Matsumoto (2018) studies both refute the collective-individualistic contention. Are there any differences between these countries? Research comparing Eastern countries is important for answering this question. Fu (2018) showed the differences of Japanese and Chinese children's behaviors when solving the puzzle tasks. In this study, we presented the same puzzle solving tasks which had been used in the former study (Fu, 2018) to typical developing 4-year-old Korean children ( $n = 14$ , 10 boys and 4 girls) and 3-year-old Korean children ( $n = 11$ , 3 boys and 8 girls). Those children's behavioral responses were analyzed by using 16 behavioral items that were divided into the three identical categories: actions, words and facial expressions. The results indicated that 4-year-old children showed more behaviors than 3-year-old children. Also, when children were asked if the puzzle they had just solved were difficult or easy, 4-year-old children responded more clearly than 3-year-old children. Moreover, the comparison with the results of former study (Fu, 2018) indicated that the behaviors of Korean children were different from Japanese and Chinese children. In cultural psychology, Japan, China, and Korea are often treated as one group when comparing Eastern and Western countries. The results of this study demonstrated that this practice is problematic.

### Key words

Korean children, East Asian culture, task, child behavior, preschool children

### 1. 問題と目的

従来の文化心理学では、西洋と東洋の比較という視点が数多く取られてきた。例えば、子どもを対象にした研究では、乳児と母親の関係について、アメリカの母子の方が日本の母子に比べ、アクティブに反応することが分かる (Caudill & Weinstein, 1969; Bornstein, Miyake, & Tamis-Lemonda, 1987; Fogel, Toda & Kawai, 1988 など)。また、中国と西洋の幼児を対象にし、中国の幼児の方が順守行動が多く、社会的評価に注目しやすく、謙虚であった (Chen, Hastings, Rubin, Chen, Cen, & Stewart, 1998; Li & Wang, 2004; Fu, Heyman, Cameron, & Lee, 2016)。

また、大人を対象にした研究では、日本人は感情の表現や、表情の解釈については、アメリカ人と異なっていた (Ekman & Friesen, 1971; Shimoda, Argyle, & Bitti, 1978)。また、東洋人は西洋人よりネガティブな情動を表現せず、ポジティブな情動を多く表現するのが分かる (Tsai, Levenson, & McCoy, 2006 など)。東洋人は西洋人よりも図と地の両方に注目するが、西洋人は地に注目することが分かった (Masuda & Nisbett, 2001; Henrich, 2016)。中国人よりアメリカ人の方が感情表現が多く、直接的である (Tinsley & Weldon, 2003; Immordino-Yang, Yang, & Damasio,

2016; Wu, Li, Zhu, & Zhou, 2019)。

これらのように、東洋と西洋を比較する時、日本または中国が「東洋」の代表として使われ、欧米の国と比較されることが多い。恐らくそれは Markus & Kitayama (1991) のように自己観と社会の関係で西洋文化と日本を含む東洋文化に分けていたのかもしれない。西洋文化では、自己は他者から切り離されているが、東洋文化では、自己は他者と根源的に結び付いているという前提に立っている。

しかし、高野 (2008) は日米の集団主義の比較研究の結果をまとめると、日本と米国の集団主義の強さは同じであることを明らかにした。果たして、東洋人と西洋人を比較するという研究は意味があるのだろうか。東アジアの中の国を一括りにしていいのか、日本、中国、韓国には違いがないだろうか。実証的な研究はほとんど行われていない。

文化の影響を検討することには早期の自己主張行動の検討が必要である。自己主張とは、「他人の権利を侵害せず、個人の思考と感情を、攻撃的ではない仕方でも表現できる能力」と定義されている (Deluty, 1979; 濱口, 1994)。自己主張は生後1年目の終わりから2年目の始めにかけて出現し、3歳ぐらいに顕著に発達していく (e.g. Bruner, Roy, & Ratner, 1982; 柏木, 1988; 木下, 1987; 高坂, 1996; 山本, 1995; 山田, 1982)。Fu (2018) は、日本と中国の子どもを対象にし、同じく東アジアにある国の子どもたちが

課題解決の時、どのような行動が違っているか検討した。その結果、日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが課題ができない時、たくさんの発話をする傾向があるが分かった。

しかし、2ヶ国で比べただけでは十分な比較ではないため、本研究ではそれに加えて、韓国の子どもに対しても、追加で同様の実験を行った。また、子どもたちの行動の相違は年齢別によりどのくらい違っているかを明らかにするため、3歳児と4歳児を比較した。以上のように、3ヶ国の子どもたちの行動の相違を比較し、より明確に東アジアにある国を一括りすることの妥当性を検討することが本研究の目的である。

## 2. 方法

### 2.1 実験参加者

本研究では幼稚園のクラス分け方に従い、年齢ごとでグループ分けした。韓国のある保育園の4歳の典型発達児15名、と同保育園の3歳の典型発達児11名が実験参加者であった。途中やむをえない理由で実験を中止してしまった1名の子どものデータを除き、有効データは4歳児14名（男児10名、女児4名  $M=4$ 歳6ヶ月、 $SD=.19$ ）、と3歳児11名（男児3名、女児8名、 $M=3$ 歳3ヶ月、 $SD=.22$ ）となった。

実験参加児全員は実験実施者と初対面であった。4歳児の実験実施者はネイティブの韓国人（20代、男性）で、3歳児の実験者は筆者自身であった。

### 2.2 装置

紙製の15ピースのパズルと48ピースのパズルと14ピースのパズルを使用した。3つパズルいずれもパズルボードが付いていた。15ピースのパズルと14ピースパズルを簡単なパズルと定義し、48ピースパズルを難しいパズルと定義した。

### 2.3 手続き

#### 2.3.1 4歳児

実験を実施した場所は独立した部屋であった。同じ部屋にいるのは子どもと実験者1名と筆者であった。実験参加者が部屋に入る前に実験者が録画装置を設定し、スイッチをオンにした。実験者は子どもの右側または左側に座り、子どもにこれからやってもらう15ピースのパズルを見せ、実験者が子どもに“今日はパズルをやってもらいます”と説明した。実験者が発した“どうぞ”という合図で実験を始めた。

15ピースのパズルができた後、“よくできたので、もう一つやってください”と48ピースのパズルを見せた。また、時計を使い、“長い針が12から3まで行ったら、それでパズル終了。”と子どもに15分の時間制限を説明した。実験の予定制限時間は15分だが、子どもに負担をかけすぎないように、子どもから“もうやらない”のようなパズルに対してネガティブな言葉が出たら、実験を終了することにした。48ピースのパズルが終わった後、14ピース

のパズルをやってもらった。すべてのパズルが終わった後、子どもにやったパズルは難しかったか簡単だったかと聞いた。装置と実験手続きはFu (2018) で使用したものと同様であった。

#### 2.3.2 3歳児

実験の手順は4歳児と同じだが、筆者が3歳児の実験者になり、実験を行った部屋にいたのは実験者と参加者のみであった。実験中使われた教示は事前に統一し、韓国語で行った。3歳と4歳児とも実験者には初対面であった。

## 2.4 分析方法

### 2.4.1 カテゴリーの作成

Fu (2015; 2018) の研究で使用された項目に基き、また、予備実験の結果も考慮して、新しい項目も取り入れ、観察する行動のリストを作った。表1は、本研究で分析する行動とそれぞれの略語を示している。

子どもの行動は、大きく動作、言葉、表情3つカテゴリーに分けた。各カテゴリーの項目内容とそれらの定義は以下の通りであった。動作項目は「頭を掻く」、「姿勢変わる」、「周りを見る」、「実験者を見る」、「顔を触る」、「頬杖」、「机を叩く」という7項目であった。「頭を掻く」は手で頭を掻く、「姿勢変わる」という項目には姿勢の崩れ、立つ、斜めになるなど座った状態から明らかな状態変換が含まれていた。「実験者を見る」は実験者を見る、「顔を触る」は手で顔を触る、「頬杖」は手を頬の下に置く、「机を叩く」という項目には指先で机を叩いたり、パズルで机を叩いたりする行動が含まれる。言葉項目では自分への独り言と実験者への発話の大きく2種類に分けた。また、実験者への発話では「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く」

表1：観察する項目内容とその略語

略語	説明	カテゴリー
SH	頭を掻く	動作
PC	姿勢変わる	
LR	周りを見る	
LE	実験者を見る	
TF	顔を触る	
Ho	頬杖	
NT	机を叩く	
Tsc	独り言	言葉
AP	実験者にパズルのやり方を言葉で聞く	
Tso	実験者に話掛ける	
Fr	眉間に皺を寄せる	
RE	眉毛を上げる	表情
MM	口を動かす	
Sm	微笑む	
Si	ため息をつく	
TT	そしゃく、舌打ち等	

と「実験者に話掛ける」に分けた。「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く」という項目は“これどこ”のような疑問文である。「実験者に話掛ける」という項目には“分からない”などの自己主張、パズルのやり方についての尋ねる以外の文が含まれていた。表情項目は「眉間に皺を寄せる」、「眉毛を上げる」、「口を動かす」、「微笑む」、「ため息をつく」、「そしゃく、舌打ち等」という6項目であった。「眉間に皺を寄せる」は眉間に皺を寄せる行動、「眉毛を上げる」は片方または両方の眉毛を上にあげる行動、「口を動かす」は口が動いたり、開けたりする行動、「微笑む」は口角が上にあがる、微笑む行動、「ため息をつく」は音出す、または無声のため息をつく行動、「そしゃく、舌打ち等」はそしゃくや、舌打ちのような行動である。

#### 2.4.2 コーディングの仕方

10秒間ごとでコーディングした。10秒間以内で項目の有無を記録し、10秒間以内で1回以上出現しても1回とした。

#### 2.4.3 信頼性

データは筆者と20代の日本人1人が記述したものであった。2人が記述したものがどれだけ信頼性のあるものかを検討するために、Loewen & Philp (2006)の研究を参考にし、ランダムに10%の子ども ( $n = 3$ ) のデータを選択し、カッパ係数を求めた。その結果、 $k = .746$ という高い値が確認された。

#### 2.5 研究倫理

本研究の目的、手順、データの処理、保管などについて、または、子どものプライバシーを保証することを説明し子どもの保護者と保育園の園長の同意を得、インフォームドコンセントを得た。

### 3. 結果

#### 3.1 全体の行動の相違

図1は3つパズルにおいて、1分間当たりの年齢別に出

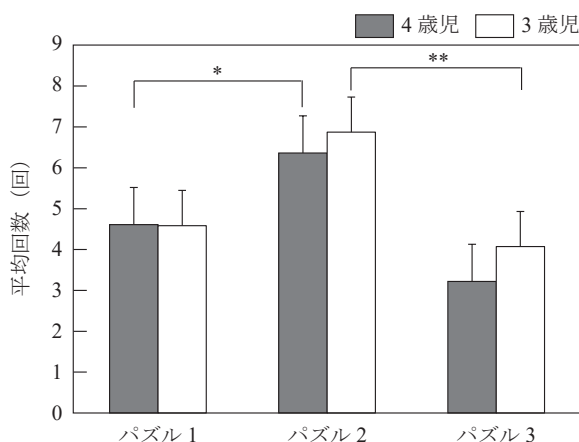


図1：パズルごとの年齢別16項目の平均回数の比較  
注：エラーバーは標準誤差。\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ 。

現した16項目数の平均回数を示している。パズルを完成した時間に個人差があるが、すべて1分間当たりとして計算した。横軸はパズル、縦軸は1分間でみられた行動の平均回数である。

年齢とパズルを独立変数にして、各パズルの行動項目回数を従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、パズルにおける主効果が有意であった ( $F(2, 46) = 18.49, p < .001, \eta^2 = .193$ )。年齢による主効果は認められなかった ( $n.s.$ )。パズルと年齢の交互作用もみられなかった ( $n.s.$ )。下位検定を行ったところ、パズル1とパズル2の差が0.1%水準で、パズル2とパズル3の差が0.1%水準で有意であった。以上のように、3つのパズルにおいて、パズルによって、子どもの行動の差があることが示された。

#### 3.2 パズル2について

##### 3.2.1 カテゴリーの比較

完成できない課題に取り組む際、4歳児と3歳児の行動の相違を検討するため、二つ目のパズルでみられた行動の相違を詳しく分析した。16行動項目を「動作」、「言葉」と「表情」の3つにカテゴリー化し、分析した結果を図2に示した。横軸はカテゴリー、縦軸は1分間あたりでみられた行動の平均回数である。4歳児と3歳児の16の行動を「動作」、「言葉」と「表情」3つカテゴリーに分け、年齢を独立変数にして、行動の回数を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、「動作」カテゴリーでは年齢による主効果は認められなかった ( $n.s.$ )。「言葉」でも年齢による主効果は認められなかった ( $n.s.$ )。「表情」では年齢の主効果が見られた ( $F(1, 24) = 6.331, p = .019, \eta^2 = .411$ )。以上のように、カテゴリーでみると、「表情」というカテゴリーでは、4歳児の行動回数が有意に多いことが分かった。

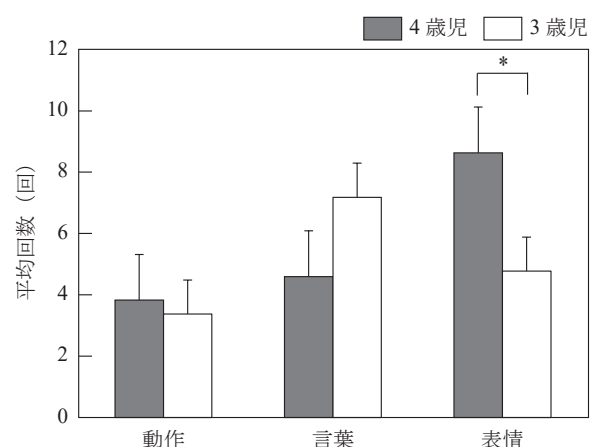


図2 二つ目のパズルにおいて、3つのカテゴリーの平均回数の比較

注：エラーバーは標準誤差。\*  $p < .05$ 。

##### 3.2.2 各項目の比較

そこでさらに、二つ目のパズルの16項目のうちのだ

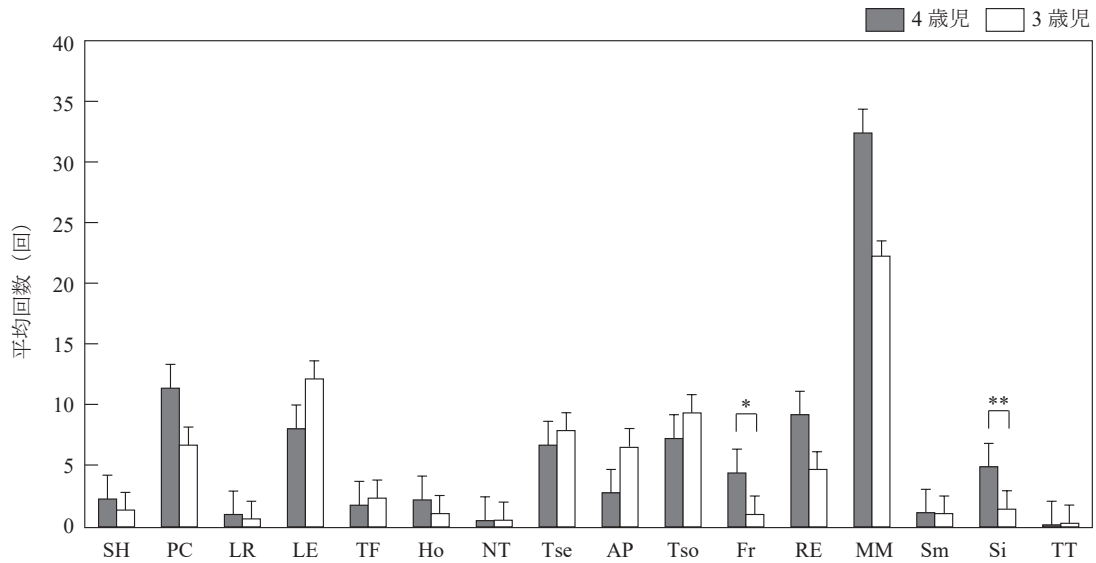


図3：二つ目のパズルにおいて、13項目の平均回数の比較  
注：エラーバーは標準誤差。\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 。

の項目に年齢の差があるかを検討した。年齢別の各項目の出現した平均回数は図3のようになった。横軸は項目、縦軸は1分間あたりでみられた各行動の平均回数である。年齢を独立変数、行動項目の回数を従属変数として、1要因分散分析を行った結果は、「眉間に皺を寄せる (Fr)」、「ため息をつく (Si)」の2項目に年齢の主効果が見られた(「ため息をつく (Si)」 $F(1, 24) = 2.97, p < .01, \eta^2 = .094$ ); 「眉間に皺を寄せる (Fr)」 $F(1, 24) = 2.33, p < .05, \eta^2 = .242$ )。以上のように、年齢による差が認められた項目と認められなかった項目があることが分かった。

### 3.3 パズル1とパズル3を完成した時間の比較

4歳児と3歳児の学習効果の有無及びその差を確認するため、パズル1とパズル3を完成した課題の解決時間をみた。その結果は図4である。横軸は年齢、縦軸はパズル解決に掛かった平均時間である。パズルと年齢を独立

変数にして、パズルの解決時間を従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、パズルにおける主効果がみられなかった ( $n.s.$ )。年齢による主効果も有意であった ( $F(1, 48) = 9.05, p < .01, \eta^2 = .159$ )。パズルと年齢の交互作用はみられなかった ( $n.s.$ )。

### 3.4 3つのパズルを始めた時の行動の比較

これまでは各パズルにおいて、行動項目の生じる状況について検討したが、ここでは、パズルが変わった時、子どもの行動に変化があるかどうかをみる。例えば、二つ目のパズルを見た時、難しいと認識するかどうか、難しいと認知した場合行動があるかどうか、また三つ目のパズルを見た時、簡単だと認識するかどうかなどを3、4歳の子どもにおいて、検討した。3つパズルを始めた10秒間に行動が有った(16項目の1つでもあった)子ども

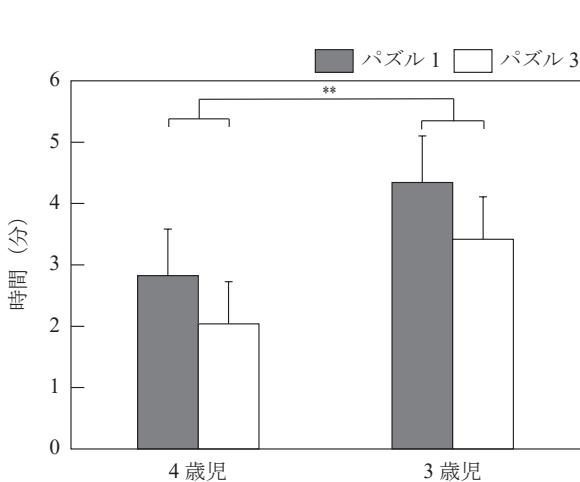


図4：パズル1とパズル3を完成した時間の比較  
注：エラーバーは標準誤差。\*\* $p < .01$ 。

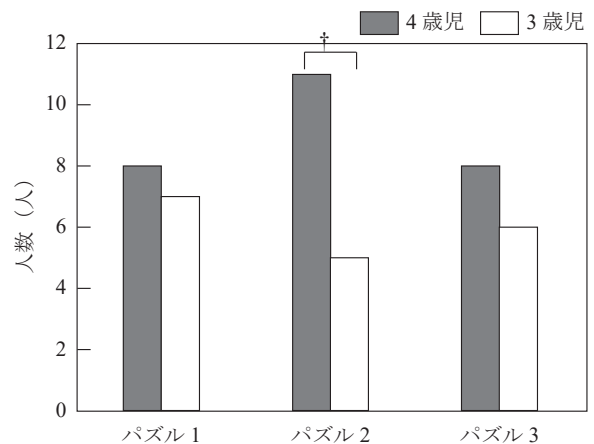


図5：3つパズルを始めた10秒間に行動が有った子どもの数  
注：†=.10。

の数を図5に示した。横軸はパズル、縦軸は行動があった子どもの数である。

まず、パズル1において、最初の10秒の間、行動がみられた4歳児は8名、行動がみられた3歳児は7名であった。3、4歳児の差は有意ではないことが分かった (*n.s.*)。そして、パズル2において、行動が見られた4歳児は11名、行動が見られた3歳児は5名であった。フィッシャーの直接法 (Fisher's exact test) で検討したところ、3、4歳児の差は有意傾向であった ( $p < .10$ )。パズル3において、行動が見られた4歳児は8名、行動が見られた3歳児は6名であった。同様に、3、4歳児の差は有意ではないことが分かった (*n.s.*)。

以上のように、簡単な2つのパズルは最初10秒間の行動の有無では3、4歳児の差がみられなかった。また、難しいパズル2では3、4歳児の間の差に有意傾向がみられた。

### 3.5 パズルが終わった時の行動の比較

3.4ではパズルに取り組む時、3、4歳の子どもが開始した時の行動反応の相違を検討したが、明らかに「成功

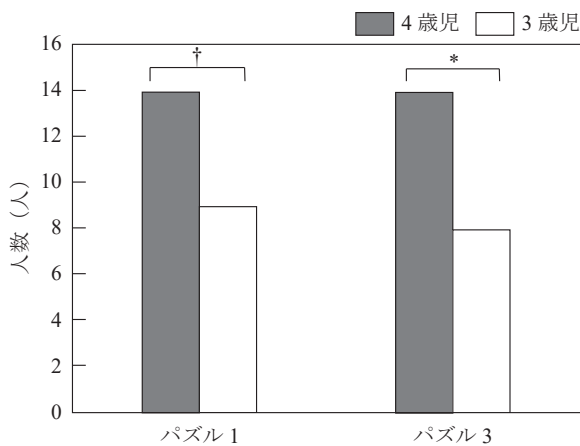


図6: 終わった時の行動有無状況を合計した結果  
注: † = .10, \*  $p < .05$ .

した場合には相違があるかどうかを検討するため、25名全員完成したパズル1とパズル3の終わった時の行動を検討する。

そこで、終わり際の行動有無状況を合計した結果を図6に示した。横軸はパズル、縦軸は行動があった子どものパーセントである。まず、パズル1において、行動が見られた4歳児は14名、行動が見られた3歳児は9名であった。フィッシャーの直接法 (Fisher's exact test) で検討したところ、3、4歳児の差は有意傾向であることが分かった ( $p < .10$ )。そして、パズル3において、4歳児に反応が見られたのは14名、3歳児に反応が見られたのは8名であった。同じく、フィッシャーの直接法で比較したところ、3、4歳の子どもの差がみられた ( $p < .05$ )。以上の結果のように、パズル1とパズル3の完成した際の反応は3、4歳児の差があることが分かった。

### 3.6 3つのパズルの難易度についての回答

パズルの難易度について、尋ねたところ、言葉で「簡単」または「難しい」と答えた子どもの人数を確認した。一つ目のパズルについて、4歳児11名、3歳児5名であった。二つ目のパズルについて、4歳児10名、3歳児6名であった。三つ目のパズルについて、4歳児11名、3歳児6名であった。3歳児に比べて、4歳児のほうが「簡単」「難しい」はつきりと返事する子が多かった。

### 3.7 3ヶ国の子どものデータの比較

図7は、3つのパズルに取り組む時、Fu (2018) と共通している12項目を用いて、Fu (2018) の結果と比べたものである。韓国では3歳児のデータのみ使用している。横軸はパズル、縦軸は1分間でみられた行動に平均回数である。3つのパズルにおいて、国籍を独立変数にして、各パズルの行動項目数を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、一つ目のパズルにおいて、3ヶ国間の差が有意であった ( $F(2, 53) = 4.82, p < .05, \eta^2 = .193$ )。二つ目のパズルにおいても ( $F(2, 53) = 10.42, p < .001, \eta^2 = .172$ )、また、三つ目のパズルにおいても、3ヶ国間の差

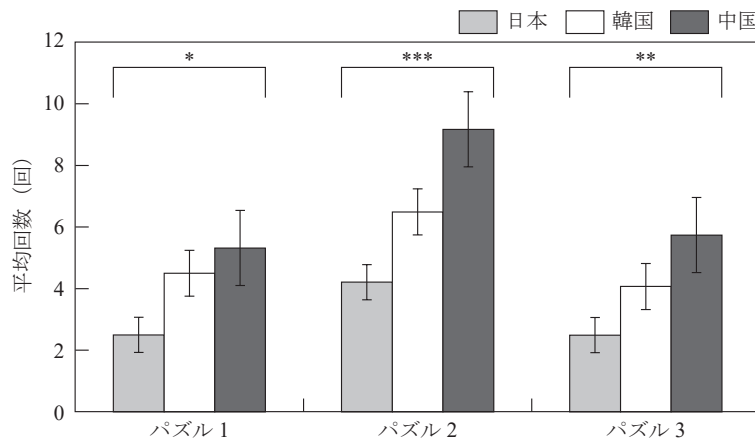


図7: 3ヶ国の子どもの平均回数の比較

注: エラーバーは標準誤差。\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ 。

が有意であった ( $F(2, 53) = 5.55, p < .01, \eta^2 = .182$ )。下位検定を行ったところ、有意だったのはパズル1とパズル3では、日本と中国の子どもの行動の差が1%水準、パズル2では、日本と中国の子どもの行動の差が0.1%水準であった。

いずれのパズルにおいても、韓国の子どもは日本の子どもより多く行動がみられたが、中国の子どもより少なかった。この結果から、韓国の子どもが問題に取り組む時、中国の子どもほど行動を表出しないが、日本の子どもより表現することが分かった。3つの国の中では、日本の子どもが最も自分の感情を出現しないことが分かった。

また、パズルに取り組む際、みられた言葉をみてみると、明らかに中国の子どもたち発話の種類が多かった。日本の子どもにみられた発話の内容は4種類（「パズルの内容を言う」・「困難だと認め、言う」・「できないことを言う」・「時計の話をする」）で、中国の子どもにみられた発話の内容を分類すると、「困難だと認め、言う」・「自分の意思を表す」・「できないことを言う」・「パズルの内容を言う」・「雑談をする」・「自分の成果をみせる」・「やり方の解説」・「他人のことを聞く」・「簡単だと表現する」・「パズル内容からの連想」の10種類であった。韓国の子どもにみられた発話は3種であった（「パズルの内容を言う」・「困難だと認め、言う」・「できないことを言う」）。

#### 4. 考察

パズル課題において、日本と中国の子どもの行動の違いを明らかにしたFu (2018)の研究に基づき、本研究ではそれに加えて、韓国の子どもたちにも対しても、追加で同様に実験を行った。

まず、韓国の3、4歳の子どもはどう違っているか、本研究で得られた結果にもとづいて論じる。パズルに取り組む時、パズルの難易度によって、4歳児と3歳児の行動の違いが見られなかったが、本研究におけるパズル課題では、3、4歳児問わずに、簡単なものよりも複雑なほうが行動がみられた(図1)。その結果から、簡単な課題よりも複雑な課題を処理する際、多くの行動が情動の変化により出現するのではないかと考えられる。Vygotsky (1993/1987)をはじめ、課題の難易度によって、子どもの行動がコーピング行動が違ってくると一致している。

また、難しいパズル(パズル2)において、カテゴリーで子どもの行動の違いをみると、「動作」「言葉」「表情」3つカテゴリーの中では、「表情」のみ3、4歳児の差がみられた(図2)。そして、詳しく各項目で相違をみると(図3)、カテゴリー「動作」と「言葉」の下位項目でも3、4歳児の行動の差が見られず、カテゴリー「表情」の下位項目の「眉間に皺を寄せる」と「ため息をつく」という2つの項目では4歳児のほうが多くみられた。その結果から、3、4歳児の子どもが難しい課題に取り組む際に、必ずしも全ての行動において差があるとは言えないことが分かった。発達において、「動作」と「言葉」より、

「表情」の方が情動より最も差がみられやすいかもしれない。また、難しい課題に取り組む際、韓国の4歳児には「眉間に皺を寄せる」と「ため息をつく」が多くみられたことから4歳児には「眉間に皺を寄せる」と「ため息をつく」で難しい課題への認識と表情を通して内的状態を表していることが明らかであった。ヒトの子は2ヶ月からの「新生児模倣」をはじめ、よく周りの人を模倣する。「眉間に皺を寄せる」と「ため息をつく」も生活している環境にいる周りの人の模倣から得たものだと考えられる。

3歳児と4歳児いずれも2つの簡単なパズルにおいては、パズル1よりパズル3のほうが完成する時間が短くなった結果(図4)から、本実験の実施過程において、子どもがパズル課題に取り組みながら、学習したといえられる。

また、容易な課題-困難な課題-容易な課題の順番で、最初の10秒間の行動の有無の比較を通し、3、4歳児のパズルに対する行動の違いを検討した(図5)。簡単な2つのパズルは最初10秒間の行動の有無では3、4歳児の差がみられなかった。また、難しいパズル2では3、4歳児の間の差の有意傾向がみられたことから、簡単な課題よりも困難な課題に対して行動が出現しやすいと考えられる。子どもがパズルに対して感情の変化を起こしていると推測される。また、子どもは課題に取り組み始めて10秒という短い間でパズルの難易度について、認知できていると推測できる。

パズル1とパズル3の完成した際4歳児は3歳児より多くの子どもたちに反応がみられた(図6)。同じ完成できた課題において、4歳の子どもたちの反応が多かった結果から、それは「できたこと」を相手に伝えるコミュニケーションと誇りの表しだと推測できる。Lewis (1992; 2001)により、ヒトの「誇り」「羞恥」など自己意識的感情の発達は3歳から社会的規範を内在化し、自分の行動と社会的な基準と比較することができるようになる。本研究の結果と一致しているといえる。

3歳児に比べて、4歳児のほうが課題の難易度についてははっきりとした返事がみられた結果から、3歳児より4歳児のほうが発話ができていることが考えられる。その結果は実験後自由遊び場面で観察されたことと一致している。実験後30分の自由遊びの時間では、3歳児にほぼ言葉のやりとりがみられず、4歳児のほうが言葉によるやりとりが明らかに多かった。本実験の結果に合わせてみると、筆者が対象にした韓国の子どもの言葉の発達は4歳になると、一気に進むことが推測できる。なぜか韓国の3歳児と4歳児は言葉の表出においてそんなに大きい差があった理由については本研究では検討できなかった。

本研究で得られた結果にFu (2018)で得られたデータに加え、図7による3ヶ国の子どもたちの行動の平均回数を比較した結果から、中国の子どもたちは日本、韓国の子どもたちに比べて、難しい課題に取り組む時、最も表情を表しやすく、また、中国の子どもたちが最も言葉による情動を表しやすい傾向がみられた。それは表情

の出し方と対人行動は密接に関係していると考えられる。動作、言葉、表情などの形で情動を表現することは文化に影響されているといえよう。3ヶ国の子どもたちが課題に取り組む時、行動の違いだけではなく、初対面の人に会う時、中国の子どもが話掛け、最も積極的に関わろうとする可能性もあると考えられる。また、人に慣れてくると、緊張なく付き合えるようになっていくだろう。

本研究の結果から中国の子どもたちが最も積極的に、相手のことを恐れずに、関わろうとする傾向があるといえるかもしれない。本研究は子どもが対象になっているが、生活の一貫性、環境の一貫性等を考えると、成人になっても、3ヶ国の中で、最も人と積極的に関われそうなのは中国人ではないだろうか。

本研究においては、パズル課題を行うことで、韓国の3、4歳児の行動の相違を検討することができた。また、同じく東アジアの国ではなるが、韓国、日本、中国は、歴史、言語、政治モード、習慣など様々な面で異なっている、それは北山(1994)が定義した文化の概念と一致している。従い、同じ東アジアの中でも国により、人のコミュニケーションの仕方、感情表出の違いがあると考えられる。ところが、幼児を対象にした研究はほとんどない。本研究において、東アジアの3つの国の子どもたちの行動の違いの検討ができ、文化比較する際、東アジアの国を一括りすることの妥当性に関して新たな知見が得られた。

しかし、本研究においては、サンプリングの関係で、性差について検討しなかった。また、今回の研究は日本、中国と韓国の子どもたちが同じ課題に取り組む際の、行動に相違を示したが、子どもたちが提供された刺激に関して自ら何もしなくてもいい課題に対する行動や反応を検討する事が今後の課題である。

#### 引用文献

- Bornstein, M. H., Miyake, K., & Tamis-LeMonda, C. (1987). A cross-national study of mother and infant activities and interactions: Some preliminary comparisons between Japan and the United States. *Research and Clinical Center for Child Development Annual Report*, 9, 1-12.
- Caudill, W. & Weinstein, H. (1969). Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, 32, 12-43.
- Chen, X., Hastings, P. D., Rubin, K. H., Chen, H., Cen, G., & Stewart, S. L. (1998). Child-rearing attitudes and behavioral inhibition in Chinese and Canadian toddlers: A cross-cultural study. *Developmental Psychology*, 34 (4), 677.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1971). Constants across culture in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17, 124-129.
- Fu, J. (2015). 困難なパズル課題に対する子どもの行動—文化差の視点から—. *臨床発達心理学研究*, 6, 3-16.
- Fu, J. (2018). パズル課題に対する子どもの行動の違い—日本と中国の比較—. *人間環境学研究*, 16 (1), 51-56.
- Fu, G., Heyman, G. D., Cameron, C. A., & Lee, K. (2016). Learning to be unsung heroes: Development of reputation management in two cultures. *Child Development*, 87 (3), 689-699.
- Fogel, A., Toda, S., & Kawai, M. (1988). Mother-infant face-to-face interaction in Japan and the United States: A laboratory comparison using 3-month-old infants. *Developmental Psychology*, 24 (3), 398.
- ヘンリック, J., 今西康子 (訳) (2019). 文化がヒトを進化させた—人類の繁栄と(文化—遺伝子革命)—. 白揚社. *The secret of our success: How learning from others drove human evolution, domesticated our species, and made us smart* (2016). Princeton University Press.
- Immordino-Yang, M. H., Yang, X. F., & Damasio, H. (2016). Cultural modes of expressing emotions influence how emotions are experienced. *Emotion*, 16 (7), 1033.
- 北山忍(1994). 文化観と心理的プロセス. *社会心理学研究*, 10 (3), 153-167.
- Li, J. & Wang, Q. (2004). Perceptions of achievement and achieving peers in US and Chinese kindergartners. *Social Development*, 13 (3), 413-436.
- Lewis, M., Alessandri, S. M., & Sullivan, M. W. (1992). Differences in shame and pride as a function of children's gender and task difficulty. *Child development*, 63 (3), 630-638.
- Lewis, M. (2001). Personal pathways in the development of appraisal: A complex system/stage theory perspective. K.R. Scherer, A. Schorr, T. Johnstone (eds.), *Appraisal processes in emotion: Theory, methods, research*. New York: Oxford University Press. 205-220
- Loewen, S. & Philp, J. (2006). Recasts in the adult L2 classroom: Characteristics, explicitness, and effectiveness. *Modern Language Journal*, 90, 536-556.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Matsumoto, D. (2018) Time to rethink the common view. *Asian Journal of Social Psychology*, 21, 4, 324-330.
- Masuda, T. & Nisbett, R. E. (2001). Attending holistically versus analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81 (5), 922.
- Shimoda, K., Argyle, M., & Bitti, P. R. (1978). The intercultural recognition of emotional expressions by three national racial groups: English, Italian and Japanese. *European Journal of Social Psychology*, 8, 169-179.
- 高野陽太郎 (2008). 集団主義という錯覚—日本人論の思い違いとその由来—. 新曜社.
- Tinsley, C. H. & Weldon, E. (2003). Responses to a normative conflict among American and Chinese managers. *International Journal of Cross Cultural Management*, 3 (2), 183-194.

- Tsai, J. L., Levenson, R. W., & McCoy, K. (2006). Cultural and temperamental variation in emotional response. *Emotion*, 6 (3), 484-497.
- Vygotsky, L. S. (1987). *Thinking and speech. In The Collected Works of L. S. Vygotsky* (Vol. 1). New York: Plenum Press (Original work published 1934), 39-285.
- Wu, M. S., Li, B., Zhu, L., & Zhou, C. (2019). Culture change and affectionate communication in China and the United States: Evidence from Google digitized books 1960-2008. *Frontiers in Psychology*, 10, 1110, 1-8.

(受稿：2021年5月11日 受理：2021年11月2日)